

# 鉄棒なわとび いなりずし



キャンディやぶこ

## 小4の秋

---

「ねえ、次の大休憩、  
なかあてに行くやろ？」

ななめ前に座ってる  
みっちゃんが  
小声で話しかけてきた。

「うん、いこいこ」

私の通ってる小学校では、  
2時間目と3時間目の間だけは  
20分間の休憩があり、  
私たちは大休憩と呼んでいるのである。

その時間は  
今4年2組では、  
なかあてが  
大流行しており、  
私とみっちゃんは  
いつも男子の中にいれてもらう。

もちろん、その中に入らないコもいて、  
女子ではゴムとびをしたり、  
おにごっこをしたり、  
中には外にも出ず、ずっと教室の中にいつづける  
ちょっと  
変わった子もいた。

休み時間まで  
教室にこもってて、  
息がつまってけーへんのかな、  
そんなんでおもしろいのかな、

と思ったが  
そのコたちと

特に仲がいいわけではないので、  
いつも横目で見て  
素通りしていた。



やぶこのひとり言・今日からはじめました！

「鉄棒なわとびいなりずし」

新連載、よろしくです～

## 飯坂先生

---

みっちゃんは積極的に  
いつも男子にも  
バンバン向かっていって  
ボールをあてにいくタイプだが

私はただひたすら逃げ回るのみ。

それでも休憩時間いっぱい

動き回ることが  
楽しくて  
チャイムが鳴るまで絶対やめない。

誰がボールを持って帰るのか、  
いつも押し付け合いで、  
みんなわれさきにと  
水道の蛇口へとなだれこむ。

4組と5組の間にある  
冷水機はいつも長蛇の列で  
「まっ、いいか。水道で」  
と

私とみっちゃんは  
蛇口を逆さにして  
ぬるい水を飲む。

そして水滴をしたたらせながら  
教室へと駆け込むのである。



「みんな、どうでしたか？20分休憩は？」  
飯坂先生がニコニコしながら

教室に入ってきた。

私を見て言った。

「小川さん。あごにお水がついたままですよ。

ハンカチくらいもってきましょうね」

## 先生あそぼ

---

先生は教室中を見渡しながら  
「汗かくほど走りまわった人も  
教室でゆっくり過ごした人も  
みんなそれぞれ楽しめたかな？」  
といった。

「先生！今度の昼休みに先生も一緒になかあてしにいこうよ」

なかあてチームの一人、ウッディが  
そう言った。  
ウッディはクラスの人気者。  
宇道(うどう)クンなので  
そう呼ばれているみたい。

小学生でカタカナのあだ名なんて  
誰がつけたかしらないけど、  
ずいぶんじゃないか？

私はそう思っていたがもちろん口には出さない。

先生は「OKOK！！」と  
あいそよくウッディに返事している。

先生も一緒に遊んでくれるんだ～

3年生の時の先生は  
おばあちゃん先生だったので、  
私たちと一緒に遊ぶなんて  
とんでもない～って  
雰囲気で誰も誘うこともしなかったけど  
飯坂先生は  
○kしてくれた。  
先生と休み時間にあそぶなんて夢だった。  
今まで他のクラスの若い先生が一緒に遊んでくれてる姿  
見てうらやましかった。

ウッディありがと。

たまには役立つね。

私は心の中で感謝した。

飯坂先生は、おねえさんのような存在だった。



## 秋の遠足

---

明日はいよいよ待ちに待った鍛錬遠足。

なので、今日の学級活動の時間は  
その遠足について話し合うことになった。

まず、  
当日はグループで行動するため  
1グループ6～7人を  
6つ作ることになった。

私はみっちゃんとは違うグループになってしまい、  
ちょっとがっかり。  
お弁当はグループごとに食べることになっていたからである。

でも、おやつは各自好きな人同士で食べてもいい、  
ということになりほっとした。

おやつは100円以内。  
くだものは1個。

一人の男子が手を挙げた  
「先生、おれんちのかあちゃん、  
いつもお弁当にバナナを半分に切って入れるんだけど、  
それだと、くだものはもってこれないん？」

「あ、私もっ！ いつもさぎりんごが入ってるんだけど」  
ヨシコちゃんもそれにつられて  
思い出したように発言した。

先生は少し考えて、  
「うう～ん…お母さんがお弁当にいってくれる果物は  
別ということにしようかな。  
それ以外で何かひとつ、もってきていい、ということにしよう」

「先生～カップゼリーは？」  
間延びした言い方で、  
ちょっと太めのクスノキ君が聞いてきた。

「ゼリーかあ～… それは、ちょっとどうしようかな。  
お母さんにゼリーをお弁当にいれてもらうのは  
今回やめてもらうことってお願ひできる？」

「あ。。はい…でも、俺…ゼリー好きなんで…」

「じゃあさ、お弁当にいれずにゼリーはおやつとして  
別に持てこようよ。」

そうだ、そうだ！ゼリーを弁当に入れるなんてずるいよ～

別の男子も騒がしくなってきた。  
クスノキ君はチラと目配せし、  
「ちょっと聞いてみます…」  
力なく、最後は聞き取りづらい言葉にフェードアウトしていった。

「先生！俺んちのかあちゃんはいつも  
お弁当にたこやきとかお好みやきいれるんやけど」  
太郎が勢いよくそう言った。

え～っ？たこやき？  
お好み焼きなんて普通いれないよ～

教室中がザワザワどよめきはじめた。

先生も、ちょっと調子に乗り始めた  
教室の空気を察知して  
「たこやきとかお好み焼き入っているお弁当なんてみたことないけど～？」  
と冷たく言い放った。  
「いや、ほんまやねんて～。ほんまにたこやきはいってんねん！」

たこやき太郎かっ！

私は心の中で叫んだ。  
ほんまに、そんなもの入れるお母さんおらんやろ。

先生も「じゃあ、明日、太郎君のお弁当のたこやき、先生にもひとつ  
分けてください。  
マヨネーズもつけて」

お茶目にそういうて  
話を終わらせた。

遠足は隣の栗栖市にある  
箱姫山。

何度か家族では行ったことあるけど  
学校からみんなで行けるなんて。  
ワクワクして今日は眠れそうにない。



## 恐竜のすべり台

---

学校から箱姫山までの  
道中はひたすら歩く。  
だって鍛錬遠足だから。  
決められたグループで  
はぐれないよう  
ひとかたまりになって  
歩くのが決まりである。

到着したら  
点呼をして  
それからまずはお弁当。

私は太郎のたこやき弁当が  
気になって気になって  
仕方なかった。  
本当にたこやき弁当が  
存在するのかどうか？  
たしかめてみたいが太郎は別のグループ。  
みだりに違うグループに移動することは  
許されない。

私は遠めに太郎を発見して  
たこやきを食べているかどうか  
確認しつつ、自分の弁当を食べた。

「ねーねー・・太郎って  
ほんとにたこやきもってきてるとおもう？」  
誰かに自分の気持ちを  
ぶつけたくて我慢できず  
同じグループのりえちゃんに聞いてみた。  
「えっ？・・」  
りえちゃんはあっけにとられ  
「たこやき？・・」  
とキヨトンとした顔をしていたが、  
「あ～のことね。。昨日の・・」  
としばらくして思い出してくれた。

「太郎のグループの子に  
あとで聞いてみたら？」  
と  
そっけない。

お弁当が終わると自由時間。

箱姫山には巨大な恐竜のすべりだいがある。  
このすべりだいは  
ローラーになっていて  
何度もすべるとおしりがいたくなってくる。

なので段ボールの切れっぱしがあると一番いいのだが、  
そううまい具合に見つからない。

私はりえちゃんと二人  
段ボールを探しつつ、  
すべりだいを滑るため  
ひたすら山道を登った。

AコースとBコースがあり、  
Aコースは距離が短いので登るのも短い。

Bコースは距離も長いので  
山道を登るのがその分しんどくなる。  
しかし恐竜の頭部に入っていくことができ、

頭の部分にはいっていくと  
恐竜がガオーとなくのだ。

簡単に登れるが、  
あっけなくすべりだいが終わるAコースか、  
登り道はしんどいが  
長く滑れて  
恐竜の顔の中にも入れるBコースか。  
どちらを選ぶかはもう決まってる。

私たちは必死になって登った。

みっちゃんのことも気になっていたが、  
どこに行ったのか見当たらないし、  
とりあえず滑り台すべるのが  
先決。

ひたすら山道を登った。

そうだ、太郎のたこやきは・・  
まつ、いっか・・そんなこと。  
今はすべり台だ。

「りえちゃん、すべるのはバラバラにする?  
一緒にすべる?」

と聞いてみた。

「あっ、もう最初はひとりづつバラバラにしようよ」

私が先にすべることになった。

ゴロゴロゴロゴロ

ローラーが回る。

あっ、もうすぐ恐竜の顔に入っていく。



ちょっとコワイ・・・

ガオーッ・・

あ、ほんとに言った言った。

言った、って恐竜が言うっておかしいな、と思いつつ  
さらにそのまますべっていくと  
先に太郎が見えた。

あ～ぶつかるやん、太郎。  
早く行ってよ。なにしてるん！！

## ザクザクエビへのあこがれ

---

「あ～ぶつかる～！！」

前方でまだ何かモタモタしている  
太郎に危うくぶつかりそうになった。

その時、ひょいと太郎がすべりだいの横を身軽にまたいで  
地面へと着地した。

「へへへ・・」

笑う太郎の歯に青のりが  
光っていた。

八重歯に青のり。

男に八重歯は許せない。絶対に！  
その瞬間、おもった。

おやつの時間になった。

おやつは誰とどこで食べてもいい、  
唯一最大の楽しみ。  
遠足のクライマックス。  
私はみっちゃんを探した。  
みっちゃんと  
大魔神の飴玉を交換しようと思っている。

「ハルちゃん！」  
向こうからみっちゃんが  
同じ班のヨシエと一緒にやってきた。

山道をかけのぼって  
はあはあ言ってる。

ベンチに三人並んでおやつを食べる。

これさ・・  
といって

みっちゃんが  
ビニール袋に入った  
「ザクザクエビ」を取り出した。

「あ！ザクエビやん！」  
私とヨシエはほぼ同時に叫んだ。  
「ハッピーアイスクリーム！！」  
二人同時に同じことを言ったときはこういうのだ。

ザクザクエビはつい最近発売されたばかりの  
小学生の憧れのスナック菓子。

発売されたばかりなので小袋タイプがない。  
私もザクエビをもってきたかったが、  
大袋をもってくるとそれだけで  
おやつの上限終わってしまうし、  
何よりリュックがザクエビだけで満杯である。

泣く泣くあきらめたのである。

なのに、なのに・・

「これで30円分やって。お母さんが測ってくれた」  
みっちゃんからビニール袋に入ったザクエビを見せられた時  
みっちゃんのお母さんって  
なんてかしこいんだろう、  
そして  
そんなことをわざわざ  
子どものためにしてくれるなんて・・と  
敗北感と  
みっちゃんへのうらやましさが交差した。



2011 / OHKA TSUBAKIHARA

# みっちゃんのお話 v o l . 1

---

「みっちゃん、昼休み、又なかあて行く？」  
給食を食べおわってから  
みっちゃんにそう聞いた。  
「‥あ、私ちょっと今日はやりたいことあるんだ」  
「えっ？何？」  
「うん‥ちょっとね‥ハルちゃんは  
なかあて行きたかったら行っていいよ。  
私、職員室に行って原稿用紙もらいにいくから」  
みっちゃんは、二つに分けた髪の毛を結んでいる  
ぼんぼりを左右に揺らしながら走って行った。

「ゲンコーヨーシ？」  
何で原稿用紙なんかいるんだろう。  
私は職員室の入口まで、みっちゃんについていった。

しばらくすると原稿用紙を3枚たずさえた  
みっちゃんが出てきた。

「昨日寝る前にお話が浮かんできたんだよ。だから、  
それが消えないうちに書いとこう～っと  
おもって」  
教室に戻ったみっちゃんは  
原稿用紙を前に鉛筆を走らせた。



## みっちゃんのお話 v o l . 2

---

「みっちゃん、あと20分しかないよ。大丈夫？」

「わかってる、って」

みっちゃんはスラスラ書いているが、

昼休みの間に

そんなに簡単に

お話を書きあがるのか不思議な気持ちだった。

「あ、あと1行しか残ってないよ、みっちゃん」

「ウルサイ、だまれハル」

みっちゃんは欄外に書きはじめた。

「あ～終わった」

欄外に1行半出たが、

ナント力書き終えた。

みっちゃんは最初っからもう一度目を通し、

ところどころ

消しゴムで消して書き直したりしている。

「あーっ、もういいか・・時間ない」

「私にも読ませて」

「うん」

キンコーン・・

チャイムが鳴った。

どやどやと、なかあてチームが汗のにおいと

ともに、

運動場の土ぼこりを運んでくる。

私もあわてて目を通した。

先生が入ってきて、

みっちゃんに目配せしている。

「できた？」

コクンとうなずき、原稿用紙をもっていくみっちゃん。

教室中がザワザワと騒ぎ始めた。

「何？」

「作文？」

「遠足のだったらこないだ書いたやん～！」

「その日はみっちゃんもおったで」

「はい！静かに」先生が場をおさめ説明した。

「みっちゃんは、昨日寝る前に

お話を思いついたそうです。

そのお話を今日書いてくれました。

読んでいいかな？みっちゃん」

先生はみっちゃんのほうを見て聞いた。

みっちゃんは少し不安そうに

ためらいながらうなずいた。

先生が先にひとり

黙読をしていた。

先生は時々微笑んだり、

ウンウンうなずいたりしながら読んでいた。

みっちゃんのお話は

こんなお話だった。



## みっちゃんのお話 v o | .3

---

みっちゃんのお話しを読む前に・・と

先生は真剣なまなざしになった。

「お話しの感想を言うことは大いに構いません。

でも、約束してほしいことがひとつあります。それは・・」

先生はみんなの顔をひとりひとり

たしかめるように見ながら

こう言った。

「みっちゃん自身のことを悪く言わないことです」

教室が森の奥にある

湖のように静まり返った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

みっちゃんのお話一

ある日学校から帰ってきた私がいつものように

おやつの

「トコロテン」を食べていると・・・

「なんだかスッパイ」

お母さんに思わず、

「今日のトコロテンすっぱいよ」というと

お母さんはあわてていったん捨てた袋をたしかめ

「あーごめん。

今日間違えて、三杯酢買っちゃったわ」という。

いつもは黒蜜なのに、

なんで今日に限ってお酢なんだろう。

しかも、私は酢の物が大嫌い。

でも、せっかくお母さんが買ってきてくれたのだから・・と

我慢してすっぱい味のトコロテンを食べることにした。

食べ終わって、

お皿をキッチンの流しに持っていったとたん、

体中に何か電流が走った。

・・今、ビリビリってこなかった？

静電気？

でも、勘違いだろう、と私は気に留めることなく  
そのままにしておいた。



その日の夜、宿題しながら  
ふとおでこに手をやった。  
なんだかプツッとした手触りがあった。  
手鏡を出して、たしかめてみると・・ニキビだった。  
「あー嫌だな・・こんなところに、  
ニキビ」  
と思っていると、鏡の向こうから  
黒い粒のようなものが走ってくるのが見えた。

黒い粒はだんだんと大きくなり、  
形を成していった。  
「何、アレ・・？」  
目を凝らしていると  
「手のひらをだして」という声が  
聞こえてきた。  
あわてて手鏡を持っていない左手を鏡の前に出すと  
その上に小さな物体が  
ひょいと飛び乗った。

一悪魔だった。  
「あーやっぱシャバの空気はいいね～  
出してくれてありがとう！  
ほんと長い間退屈だったよ。  
お礼にこの金色の玉をあげるよ」  
といって、  
その小さな悪魔はクリスマスツリーの  
飾りのような金色の玉を私に差し出した。

「ニキビ、つぶしちゃあダメだよ。  
どこかに銀色の玉があるはずだから、それを見つけると  
最強のパワーを発揮するんだ。  
もうニキビなんかどうでもいい  
最強の人間になれるんだ」

そう言って  
悪魔は私の机の周りを探検し始めた。





私はその不思議な玉を  
手にとってくるくる回したり、  
ニオイをかいだりした。  
「あ、俺さまはテキトーに帰るから  
手鏡だけ上向けておいといてくれる？」

そういうと  
悪魔は私がいつも読んでいる  
「世界名作童話全集」のページの間に  
すべりこんでいった。

私は、  
気がついたら  
私は川の上流にたたずんでいた。  
大きなグレープフルーツの中身をくりぬいた  
舟のようなものが置かれてあった。  
私はそれに飛び乗り、  
川を下って行った。  
トコロテンのお酢と  
グレープフルーツで発電がされ、  
舟はどんどん進んでいった。  
私は銀の玉を探しに行く  
冒険に出かけるのだ。

○●○●○●○●○●

「冒険に行くなんてカッコイイー」

「よく昼休みの短い間に  
こんなお話がかけたね」  
  
「グレープフルーツと酢で発電なんか、  
できんの～？」

みんなは口々に言いあつた。

先生はニコニコしながら  
聞いていた。

突然、みんなのざわめきを破るように

「なんかその鏡の中から  
悪魔がでてくる・・とかいう話し、  
読んだことある」  
太郎が言い放った。

「玉を見つけに行く、なんてのも  
ドラゴンボールの読みすぎじゃない？  
それに、宿題でもないのに勝手に書いて  
みんなの前で読んでもらうなんて、  
ただの自慢じゃんー」

「太郎」  
矢継ぎ早に発言する太郎に  
先生がいさめるように低い声で押さえた。

「さっき、そのことは先生が言ったよね。  
あとで職員室にきなさい」  
わたしはみっちゃんを  
ななめ後ろの席から  
そっと見た。  
みっちゃんは、口を真一文字に  
きゅっと結び、  
唇をかみしめているようだった。



# みっちゃんの夢

---

「絶対むかつくよね、太郎」

私は帰りがけ、  
みっちゃんにそう言った。

「うん・・」  
みっちゃんは、いつものみっちゃんらしくない様子で  
なんだか私には沈んで見えた。

みっちゃんはずんずん先に歩いて行った。  
「みっちゃん、みっちゃん。待ってよ～」  
私はランドセルをカタカタいわせながら  
追いかけた。

くるっと  
ふりかえったみっちゃんが  
こう言い放った。

「あのさっ！  
今度なかあてで  
太郎に思いっきりボールぶつけてやるっ！」

またみっちゃんは、ずんずん歩いて行った。

私はみっちゃんに聞きたいことがあった。

「あのさ・・あの・・みっちゃん・・」  
必死で追いかけながら背中から声をかけた。

「あの。みっちゃん、ちょっと聞きたいことあるんだけど。。  
お話とか、書いて、  
はずかしくない？」

「えっ、なによ。  
ハルまでそなこというの」

みっちゃんは

怒ると私のことを呼び捨てにする。

「いや・・そういうのじゃなくて・・」  
私はちょっとあせった。

「なんてゆうか、  
こうゆうこと、考えてるんだな、とか  
人に思われるのって  
嫌だな、とか  
そうゆうこと、思わない？」

「思わないよ、全然」

みっちゃんは  
キッパリ言った。

「だって、言論の自由！！  
・・てこないだ社会で習ったでしょ」

「えっ、そんなこと習った？」

「あ、塾かも。ま、どっちでもいいや。  
とにかく自分で思ったことは  
どんなことでも  
書いていいんだよ。この国では」  
「ふう～ん・・」

なんだか、ちょっとみっちゃんが  
おとなびてみえた。

「ねえねえ。みっちゃん。  
もういっこ、聞いてもいい？」

「なによ、まだあんの？」

「みっちゃんって、大きくなったら  
お話書く人になるの？」

いやいやえんとか、ぐりとぐら書いた人みたいに」

「えっ？

また懐かしいこというね～

そんなの、ならないよ。私」

みっちゃんは

空を見上げて

大きくのびをした

「私、大きくなったらお嫁さんになるんだ！！

で、ぐりとぐらを読んであげるお母さんになる！」



ぐり

ぐり

かわぐり くわぐり

## 先生の結婚

---

三学期になった。  
もう、  
このクラスともあと3ヶ月足らずでお別れ。  
いろいろあったけど、楽しかった。  
ずっと  
4年生だったらいいのに、と  
本気で思った。

3月になって4年2組が終わっても、  
4月になったらまた4年2組がはじまる。  
今のクラスの仲間で。  
今の飯坂先生のままで。  
そんなことを考えていたある日、  
飯坂先生が  
3月でこの学校からいなくなっちゃう、ということを  
聞いた。

ある日の終わりの会、  
ついに真相を聞かずには我慢できなくなった  
みんなの状況を察して  
先生が質問コーナーを  
設けてくれた。

「先生、3月でこの学校からいなくなっちゃう、ってほんと？」

一番前に座っている  
カオリが恐る恐る聞いた。

「ほんとですよ」

えーっ！！  
やっぱり～  
なんで～！！

みんな口々にざわめきはじめた。

「学校やめるの？」  
「先生をやめるの？」

教室中のざわめきを  
おさえるように、

「この学校はやめますが、先生はやめません」

先生ははっきりそう言った。

「えっ？・・じゃあ、何？  
どうすんの？」  
誰かが叫んだ。

「先生は、結婚します。」



えーっ！！

「それで新しい学校へ行って、  
そこでまた先生をします」

「先生～俺たちを裏切るのかよ～」

また誰かが叫んだ。

「先生結婚するの～」

カオリは涙声だった。

「はい！では

みなさん、先生の結婚相手に興味しんしんだと

思うので、質問あつたら、どうぞ。

何でも受け付けますよ。」

先生はにっこりほほ笑んだ。

「なんでも・・・？」

「そう、なんでも。」

「ほんとに、なんでも答えてくれるんだな～？」

クラスで一番体の大きいタケシが

言った。

## 問題発言

---

「先生、なんていう名前の人と結婚するの？」

ユウコが聞いた。

「高橋ですよ。」

「じゃあ、高橋まゆみになるんだ～  
へーんな名前っ！！飯坂まゆみのほうがいいよ」

「そうかな？そのうちなれるんじゃないのかな・・？」

「先生」  
タケシがおもむろに  
口をひらいた。

「その高橋ってひとと・・セックスした？」

えっ？  
先生は一瞬驚いたような顔をした。  
教室中も騒ぎ始めた。  
「お前、よくそんなこと聞くな～」

「何々？セ・・ック・・て何？  
わからんー！なんのこと？！」  
カオリは一番前でバタバタしている。

「しましたよ」

先生はあっけなく答えた。

「えーっ、何、何をしたの？」  
まだカオリは不思議そうな顔をしている。

「カオリ、バカやな～  
お前、夜いっぺん寝ずにずっと起きてろ。」

セ。。ツクスてのはな～  
とうちゃんとかあちゃんが  
布団の中で  
雪だるまごっこすることだよ」

タケシがこともなげにそういった。

「俺なんかさあ～  
夜中にトイレ行こうとしたら  
どこからか猫の鳴き声みたいなの、聞こえてきて・・  
俺んち、猫なんか、飼ってないのに・・  
野良猫でも入り込んでんのかと思ったよ・・そしたら。」

「タケシ」  
飯坂先生がさえぎるようにいった。

○●○●○●○●○●

「ねえねえ～・・大丈夫かな・・みっちゃん」  
私は学校の帰り道にみっちゃんに  
聞いてみた。  
「何が・・？」

「飯坂先生。堂々とみんなの前であんなこと・・」  
「あ～あれ・・ね・・」  
「絶対誰か家帰って言うよ。  
そうしたらその親が学校に言って・・」  
「ん～でも、もういいんじゃない。先生、どっちにしても  
もうこの学校からいなくなるんだし。  
でも、そんな親も親だよね」

「だよね・・だけど。。先生のこと・・  
どう思う・・？問題発言じゃない・・・」

「飯坂先生、かっこいいよ」

そうかなあ～



## 5年生にむかって

---

先生は、やっぱり校長先生からちょっぴり  
怒られてしまったようだ。

「仕方ないよね・・」  
私がそう言うと  
「ほんと先生稼業もラクじゃないよね」と、みっちゃん。

そして何かにつかれたように  
話しました。  
「オトナはさ～なんでも  
ほんとのこと言いなさい、正直に言いなさい、なんていうけど  
そのオトナは実際そうはできないんだよ。  
ほんと、オトナって厄介。」

そうか・・そうなんだ・・  
やっぱりオトナにはなりたくない・・

「そうだよ。  
セ・・ックス・・どうこう、っていう  
言葉の問題だとしたら  
じゃあ、私たちの存在はなんなの、って  
ことになるじゃん。  
そうゆうこと、オブラーントに包んできれいごとだけで  
うま～く解決したようにして、  
ごまかすのがオトナは得意」

「もう、みんな知ってるのにね」  
「そうそう、あ、知らないコもいたけどね」

でもさ・・  
そう言って  
みっちゃんは  
運動場の土の上に  
棒で落書きをはじめた。

「あと少しで先生ともお別れなんだな～」

「5， 6ねんも一緒だったら  
修学旅行にも一緒に行けてよかったのにな～」

「ねえねえ、ハルちゃんとは絶対おんなじクラスになりたいね！！

そうしたら修学旅行で、私いろいろ教えてあげるよ」

「えっ？なになに・・？何を教えてくれるの」

「私、姉ちゃんのポップティーン盗み読みして  
いろいろいっぱい知ってるんだ、  
そんな情報～」

みっちゃんは意味深な  
笑いをした。



## みっちゃんのブラジャー

---

5年生になった。

春休みに飯坂先生のおうちに絶対遊びに行くね、なんて  
約束してお別れしたのに  
結局行けなかった。

子どもどうしで  
市外へ行ってはいけませんという  
学校のきまり。

先生は、いいよ。私が責任とるよ、なんて  
いってくれたけど  
そんなのね～どうする～・・なんてみっちゃんと  
言いながら、  
お互いウジウジ考てるうち  
春休みは終わってしまった。

5年生は無事みっちゃんと同じクラスになれて  
二人飛び上がって喜んだ。  
でも、  
いまいち担任の先生が・・

こんな先生今までこの学校にいたっけ？というような  
影の薄～いおもしろくもなんともなさそうな  
ただのオッサンだった。

吉田先生、45歳。

「なんだか幸先悪いよね・・」私はしょんぼりだった。  
みっちゃんもしみじみ言った。  
「男子もいまいちパッとしたの、いないしさ～」  
「うん・・4年の時のほうがまだマシだったよね、全体的に」  
「でも、5. 6年ってクラスがえないんだよ～  
このまま卒業までいくんだよ～どうする・・」  
「5年で林間だっけ？あるんだよね。って6年で修学旅行。  
もう小学校の集大成、メインイベント目白押し、てなときに  
このありさまだから・・」  
「まっ、仕方ない！  
なんとかやってると道はひらけてくるだろ。

なんてったってミチコ様だから」

みっちゃんはのびあがって  
両腕を上にあげて左右にねじった。

「あれ‥？」

その時みっちゃんのブラウスを通して  
ヒモのようなものがすけて見えた。

「みっちゃん‥それ‥もしかして  
ブラジャーのひも？」

「あ、これ‥？そうだよ。

私さ、5年になったから  
毎週土曜日、市のスポーツ少年団の  
ソフトテニスはじめることになったんだ。  
で、お母さんが買ってくれた」  
「ふうん‥」  
テニスか‥いいな‥  
ブラジャー‥もっといいな。。



## クルム伊達公子にはなれないけれど

---

「お母さん、私もスポーツ少年団のテニスやりたい」

夕食後、片づけしているお母さんに話しかけると

「えっ‥？テニス？何、それ」

お母さんは眉間にしわを寄せた。

「みっちゃんが今度はじめるんだって。

だから私もやってみたいなあ～‥て‥」

実はお母さんの返事はだいたい想像がついていた。

しかし、私は子どもなのだから

親の援助なしでは何も始められない。

「ダメよ、あんたは」

やっぱり‥そうくると思った‥

「幼稚園の頃から習ってたピアノ、

去年やめちゃって‥どうすんの、この物置ピアノ」

確かに‥

ピアノって習わなくなると途端に弾かなくなる。

そして、ちょっとだけ置かせてもらおう。。と

ピアノの上に読みかけの本、雑誌。

帰ってきたらピアノのイスのうえに手提げ置いたり。

ふと見るとお父さんのジャンパーまでかけたのは一体誰だ。

すっかり物置化してる。

「クリスマスにウサギが欲しい、なんて

突然言い出して‥絶対世話をするなんて言っときながら‥

結局1ヶ月も続かなかったでしょ、あとは全部お母さんの役目」

お母さんは過去を思い出しのか、

怒りを茶碗にぶつけながら洗い物を始めた。

はあ～・・そうでした・・

しかし・・

しかしだ・・

子どもにはどんな可能性があるのかわからない。

ピアノとウサギの世話には能力を発揮できなかつた私だが  
テニスにはどんな未知数が秘められてるのかわからない。

しかし、それを言いだす勇気は私には・・ない。

(@—ρ—@) z z z z

「そりや～ダメだよ、ハルちゃん」

お母さんとの一部始終をみっちゃんに話すと  
同じように一蹴された。

「でもさ・・もしかして。  
クルム伊達みたいになれる可能性の芽を。  
ここでつぶしてしまうかもしれないんだよ」



みっちゃんは軽く笑って、  
「その可能性は私がいただきます」

でもさ・・とみっちゃんは続けて、  
「今度スポーツ少年団のプリントもらってきてあげるよ。  
他にもいろんなスポーツとかサークルみたいなのとかあるんだよ。  
ハルにあうのもあるかもしれないよ。  
なんせ、せっかくの子ども時代！何かしないことにはもったいないよ」

## 合唱団

---

みっちゃんからもらった  
スポーツ少年団のプリントには、

剣道・柔道・バレーボール・ソフトボール・サッカー···

などの運動系と、

パソコン・書道・英語検定、

などのお勉強系と、

彫刻・粘土細工···

なんてものまである。

せっかくの

土曜日の学校休日に勉強なんてやりたくないし、

彫刻や粘土なんて図工の時間のようなジミなこと

モサモサやる気起きない。

とりあえず、

お母さんにプリントを見せた。

「あ～この間言ってた、  
スポーツ少年団の···?  
うーん···そうだわね~···」

お母さんはプリントの上から下、

なめるように目をはわせ、

そしてキラリと目を光らせた。

「ハル！これにしなさいよ。  
これいいよ！」

お母さんが指をさした欄を見ると  
『合唱』と書かれていた。

合唱？

そんなものの、目にも入らなかった。

「これだとお金かかるよ、きっと！

私はガッカリした。

お母さんの第一条件は  
『お金がかかるない』ことなんだ。

ピアノで懲りたということは、  
私にだってわかる。  
テニスを反対したのも  
ラケットだの、ユニフォームだの、お金がかかるから  
ダメといわれたので、  
なるべく  
お金のかからないものを望んでいるのだろう。

しかし、あまりにも  
ひどすぎないか。  
娘の将来につながるかもしれない  
習い事を、  
ただ「お金がかかるないだろう」ことで決める親。

普通、  
「あなたのやりたいことは？」  
とまず子どもの希望を尊重し、  
そうして親から見た子どもの特性を加味し、  
最後に金銭的なことを考慮の上決めるべきではなかろうか。

それが、私の人格なんてどこへやら、  
ただお金がかかるないという理由だけで  
決めるなんて・・

耳タコができるくらい  
聞かされたオトナたちの言葉  
「夢に向かって生きましょう。」  
「目標をもって頑張りましょう」

って、そんな夢も目標もハナっから  
打ち砕かれた。

本当にオトナって勝手、  
オトナはズるい。

「合唱なんか嫌だよ！！  
歌なんか音楽の時間に  
これでもかってくらい歌ってるし、  
そんなの入ってもなんにも面白くないよ！」

それに・・それに・・  
お金のことばっかり・・  
私はなんだか情けなくて涙声になってきた。

しかし、母は屈しなかった。  
私の涙顔に動じずこう言った。

「合唱団っていいのよ。  
お母さんも昔、実は合唱団に入ってたの」

「またそんな嘘！！」

「ほんとよお～・・・  
でね、クリスマスになると  
聖歌隊になって  
いろんなおうちを回ってローソクに火をともして  
玄関口で歌って回るのよ。」



「そんなこと、したくないっ！！」

私は家を飛び出した。

飛び出ましたが、結局私は  
合唱団に入れられた。

## ニワトリ事件

---

「えっ‥？それで合唱団に入ることになったの？」

みっちゃんが目をまん丸にして聞いた。

「ううん、なんか、  
なぜかお母さん張り切って、申込書を提出に行っちゃったんだ」  
「ふう～ん‥ハルちゃんのおばちゃん  
なんかあるんだろうか？何か企んでたりして‥‥‥？」  
「そんなこと何もないよ。  
でもまあ、私もあまり  
気が向かなかつたけど、偶然ピアノで一緒だったキミエちゃんが  
合唱団に入ってる、ってことがわかってさ。  
ちょっといいかな。って思ってる。  
キミエちゃんは時々合唱の伴奏をピアノで弾くこともあるみたいだけど。」

「ううんや‥ま、お互いがんばろ」



◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

小5の秋。

2学期になった、ある日事件が起きた。

事件とは自分では思っていなかったのだが

事件になってしまった。

ニワトリ事件だ。

## ニワトリ事件 v o l . 2

---

5年生になると委員会活動がある。

学級委員はじめ、

図書委員、美化委員、園芸委員・・などである。

その中で私は飼育委員になった。

ウサギ小屋とニワトリ小屋の世話を

委員でもちまわりで交代でするのである。

えさ係と掃除係はそれぞれ別で1ヶ月交代。

今月私は掃除係になった。

掃除は1週間に1回。

家で飼ってたウサギは世話をすることを途中放棄してしまったので

学校の活動はキチンとしようと

心に決めた。

ウサギのコロコロ糞を

掃除した後、今度はニワトリ小屋へ。

たくさんニワトリの羽根が落ちている。

それらを拾い集める。

これって・・

よくドラマとかマンガで見る

ペンに似ている。

こんな羽根つきペンで

書いてみたい・・・

それから・・

あ、そうだ。

この羽根ってアレにも似てる。

気がついたら私は

ニワトリの羽根をどんどんむしっていた。

「ぎゃあ～！！」

保健の先生がそんな私の様子を見て叫んだ。

「何してるの。あなたっ！！」

えっ・・？

私は手に大量のむしった羽根を持っていた。

ニワトリは逃げ回っている。



担任の吉田先生に即座に通報された。

## 翼をください

---

「先生、吉田先生、小川さん何か  
クラスで変わった行動ありませんでしたか？  
もしかして家庭に何か問題があるかもわかりませんよ。  
ちょっとキッチリ話を聞いてみたほうがいいと  
思いますよ。」

保健の先生は私の目の前で  
吉田先生に興奮しながらそう告げている。

「よろしければ私が保健室で話し聞きますけど・・」

まるで吉兆のささやき女将のように  
吉田先生の耳元でささやく保健の先生。  
しかし、ささやき女将よろしく  
すべてささやきはこちらにまで筒抜けなのである。

吉田先生はまだまだ続きそうな保健の先生の  
話を目で制して  
「その場には及びません。私がハルちゃんと  
話しますので先生はご心配なさらいでください」  
冷静におさめると  
私に「ハルちゃん、あとでちょっと話ししようか」といった。

あ～あ・・職員室行きか・・  
ちょっとウンザリしてきた。  
他の先生がたくさんいる前で説教されるなんて  
まるで悪い子みたい。  
私って悪い子なのかな？

お父さんは私のことを  
「ハルはいい子。本当にいい子」と  
いつもいってくれる。  
だから私はずっと自分のことをいい子だと  
信じて生きてきた。  
お母さんにぼろくなづらってお父さんが私を守ってくれてる気がしてた。  
お母さんがガンガン怒ってるその横でお父さんはいつも

私をニコニコしながら見ていてくれて  
「ハルは**本当はいい子**なんだよね」といった。  
でも、今ふと考えたら  
**本当は‥？**てことは、  
じゃあいい子ではなかったのかもしれないけど、  
単純だから気がつかなかった。  
いい子じゃないから今から先生に怒られるんだろうか。

吉田先生は「音楽室に行きましょうか」といった。

音楽室？  
なんで？とおもったが  
ちょっとほっとした。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

先生がグランドピアノのイスに座って、  
私は生徒が座るオルガンのほうに腰掛けた。

「ハルちゃんは‥確か  
ピアノが上手でしたね」  
先生はおもむろにそう言った。

「あ‥でも。‥もうやめちゃったから。。」

「そうですか‥よく音楽の授業が始まる前に  
このピアノで曲を弾いてましたね。

あれは何と言う曲だったんですか？」

「えっ。。と‥

嵐‥とか。。西野カナとか‥」

先生はふっと笑って

「先生は全然わかりませんが楽しそうでしたね」

「みんなも喜んでくれるから‥だけど

家でもそんな曲ばかり練習してピアノの練習曲を  
全然弾かなくなってしまって。

先生からも怒られて‥で、やめちゃった」

「そうですか‥

この間懇談があったとき

そういえばお母さんが合唱団に入った、と言つておられましたが  
今何を練習してゐるんですか？」  
「あ‥‥あの。。翼をください、とか‥‥」

先生はイントロを弾きはじめた。

私は思わず口ずさみ始めた

♪今‥‥私の‥願い事が～  
叶うならば、翼が欲しい。

(中略)

子どものとき、夢見たこと  
今も同じ‥夢に見ている‥

この大空に翼をひろげ

飛んでいきたいよ

哀しみのない

自由な空に翼はためかせ

ゆきたい‥



なんだか泣けてきた。

## 12歳の夢は原点

---

「小川さんは・・今、何歳だったかな？」

先生は私のことを

突然苗字で呼びかけた。

「10歳？11歳？」

「・・あ、10歳です」

「そっか。じゃあ、1/2成人式だね」

「2分の1？」

「最近はそんな風に言って、

お祝いするおうちがあるみたいだけどね」

「あーうちは全然。

そんなの、全く関係ありません・・」

「10歳は1/2オトナ・・半分はもうオトナなわけだから

小川さんは

今日自分のしたことを充分キチンと

考えられると思うので、

もう先生は何も言わないでおきたいけども、でも

やっぱり先生は疑問なので

質問ということいいかな？」

「・・はい・・」

「どうしてニワトリの羽根をむしっちゃったかな？」

「あの・・ドラマやマンガなんかで

羽根のついたペンなんかがでてきて・・

そうゆうのにあこがれて、これでできるかな～・・とか、

最初は落ちてる羽根をひらってただけだったんだけど、

そのうちどんどん羽根が欲しくなってきて・・

ずっとまえ赤い羽根共同募金があったときのこと

思い出したりして、

この羽根に絵の具で赤い色をつけて

私も共同募金してみたいな・・・とか

考えてたらどんどん・・気がついたら

・・いっぱい・・むしってしまって・・」

「赤い羽根か～・・」

先生は半ばあきれたように、半ば感心したように

薄く笑みを浮かべていた。

「小川さんは、つくづく面白い子だね」  
面白い子・・  
そう言われて喜ぶべきか。  
いや、違うだろう・・ほめことばではない・・

「確かに、赤い羽根は小川さんの考えた通り、  
ニワトリの羽根で作っていますよ。  
でも、今度そんな面白いアイディアが浮かんだら  
一人で突っ走らないで、先生に一言相談してくれるかな」

先生はピアノの鍵盤に  
えんじ色のカバーをかけながら言った。

「来年卒業するときに・・  
卒業文集をみんなで作ります。そのときに  
それぞれ自分のなりたい夢というのも書いてもらいます。  
あと1年ありますから  
今からでも決して早くはありませんよ。  
考えてみてくださいね」

夢・・私は将来なんになりたいんだろう・・?

「12歳のときに思い描いた夢というのは  
その人が本当になりたかったものなんですよ。  
先生も大人になって、引っ越しのときに  
自分の小学校の卒業文集読んで、  
あ～そうだった・・て思いました。  
ちょっと笑ってしまったけどね」

将来の自分のために  
あと1年かけて・・  
自分の夢を探す。

ピアノの画像が頭に浮かんできた・・  
私はピアノが好きだったんだ。





## サッカーは男子のスポーツ？

---

3学期になった。

3学期になれば体育の授業でやることは

今までならば必ずドッジボールだった。

しかし、5年生はサッカーになるはず。

私とみっちゃんはそれをとても楽しみにしていた。

それなのに・・

体育の授業前の

吉田先生の言葉はこうだ。

「男子はサッカー、女子はドッジボールをしましょう」

なんで、女子だけドッジ？

私たちは

運動場を広く使いながらサッカーをする男子を横目に、

片隅でこそこそドッジをした。

先生は男子のほうにつきっきりで女子はほったらかし。

授業が終わってみっちゃんは爆発した。

「あまりにひどいよ、先生！！

思わん？ハルちゃん」

「うん。。。」

私はニワトリ事件以来先生のことを好意的に思っていたので

このサッカーのことは

納得ができないが、しかし

みっちゃんと同じ

怒りのレベルにまで達して

先生のことを悪く言う気がおきなかった。



## 子の心、親知らず

---

「飯坂先生だったら絶対サッカーやらてくれたよ」  
みっちゃんは  
ふくれている。

「だろーね・・きっと。てゆうか、  
飯坂先生じゃなくても、  
他のクラスはみんな女子もサッカーやってるんだけど」

「なんで吉田先生、男女わざわざわけるんだろう？  
はっきりいって、小学校の今、サッカーしないと  
もう一生サッカーするチャンスないよ。  
よっぽどやりたければ

個人的に地域のクラブみたいなのに入るとか、そうゆうことしないと」

「そこまでしてやりたいわけじゃなくて  
ただちょっとやってみたいな、てだけだしね」

「私は、先生が  
男女を分けてることに腹が立ってんのよ。」

「あ～。。そつか。。」

「ハルちゃんは腹立たないの？」

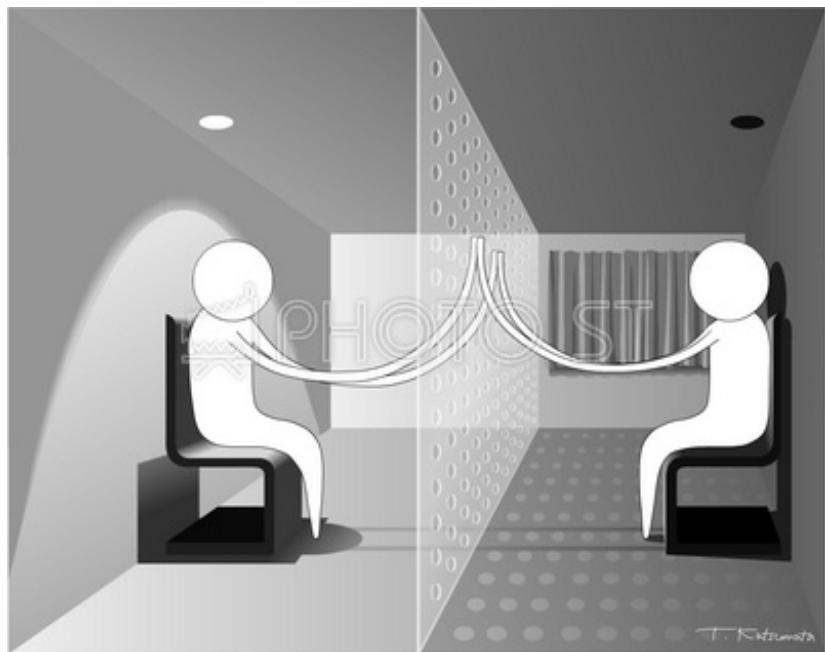
「うん・・先生のやり方自体はなんでだろ、って  
おもうんだけどね。でも先生のこといい先生って  
おもってたからちょっと・・」

「えっ。ハル、あんたあのオッサンのこと  
いい先生だなんて思ってたの」  
みっちゃんの怒りテンションがあがってきた。  
矛先が私に向いてきた。  
みっちゃんにはニワトリ事件のことは  
話していない。みっちゃんは  
日ごろから何かと頭の固い吉田先生には不満がたまっていたようだ。

「もし、お母さんに言ったら絶対学校に文句いいにきそう」  
よっぽどみっちゃんは腹にすえかねてるようだ。  
「だけど、親がモンペだなんて嫌だしね～」  
(注・モンペ：モンスターペアレントの略)

「みっちゃんのお母さんだったらほんと、学校にきそう」  
「でしょ。だからぜってえ～親には・・あ、いえんわけさ」  
みっちゃんは歌舞伎役者の真似をしながら言った。  
「それにさ、親が学校にのりこんでくるなら、  
もう私自分でいうよ。」  
「うん・・そのほうがまだいいね」  
「ほんと、子の心、親知らずだよ。ちょっとは子どもの身になってほしいね、  
最近の親」  
私はもうちょっと親に私のこと考えてほしいけど・・と思ったが口には出さなかった。  
「この間もさ～  
隣のクラスの荒木君のお父さん、学校にどなりこみにきたらしいよ」  
「えっ、そうなん・・なんでっ？」

「それがさ～・・」  
みっちゃんは急にヒソヒソ声になった。



## みっちゃんの決断

---

「漢字テスト、あるやん。毎日、小テスト」  
「あ。うんうん。。」  
「あれで・・  
はねる、部分をキチンとはねていなかったので  
字はあってもペケになってたんだって」  
「それで・・？」  
「うん、そうゆうのが厳しすぎるって」  
「あ～でもさ・・はねるとかはらうとか  
結構大事だよね・・だけど、  
それでのりこんできたの？」  
「それが荒木君のお父さん、中学校の国語の先生なんだって。」  
「え～っ、先生だったらなおさらじゃん？  
厳しくするほうじゃないの・・？」  
「いや、でもさ・・もう中学なんていくと  
そこまで漢字厳しくしないでしょ。他の面を重視していくみたいで」  
「はあ～・・」  
「で、隣の組の永本先生、ちょっとノイローゼ気味になっちゃって・・  
先生が登校拒否だよ」

「ウソッ・・」  
「朝、学校までくることはなんとかくるんだけどね。  
車できてたやん。その車から降りれなくなったり・・とか」  
「やっぱ先生稼業は大変だな～」  
「そうそ。」  
「でも、それでもみっちゃん  
吉田先生にサッカーのこと、言うんだよね」  
「私は子どもやん～生徒やん。だから言えるんだよ。  
言っても構わない。親から言われるって  
先生もキツイと思うんだ」  
「あ～。。でも先生に意見言うって  
すんごい勇気。ほんとに言えるんだろうか、いくらみっちゃんでも。

そんな私の不安そうな様子を感じ取ったのか、  
「私は言うよ。」  
断言するみっちゃん。



# 先生をまるめこむ v o l . 1

---

3時間目は体育の授業だ。

先生は、この間と同じセリフ

「では、男子はサッカー、女子はドッジをしましょう」と言った。

運動場にさんかく座りをしていた私たちは

ザワザワとたちあがって移動しようとしていた。

みんな、何の疑問も抱いていないようだ。

先生が男子と一緒にサッカーコートがあるほうへ行こうとしている。

勇然とたちあがって先生のまえに立ちはだかった人がいる、

みっちゃんである。

「先生、どうして男子はサッカー、女子はドッジなんですか」

「どうして、といわれても」

先生は面喰っている。

「サッカーは男子のスポーツだから」

語尾が消え入りそうになった瞬間、

みっちゃんがさえぎるように言い放った。

「それはこの間聞きました。先生は、なでしこ知らないんですか」

「知っていますよ」

「じゃあ、なんで」

「小学校だと男子と女子が混合でサッカーすることになるでしょう」

「それが」

「ちょっと具合が悪いんです」

「どうして。他のクラスは男子も女子も一緒にサッカーやってるよ。

高学年の間は女子のほうが男子より体格うわまわってるし、体力差もないよ。

中学になったら、男女別々の体育の授業になり

女子はサッカーなんてしないとおねえちゃんからきいてます。

今、サッカーしないと

**私たち、もう一生サッカーできないんです**

「一生、っておおげさだね」

先生は笑っている。

「笑い事じやありません。大げさです」



「うちのお母さんだって  
サッカーなんしたことないから  
何の興味もないし、ルールだって全然わかんないから  
あれだけテレビでやってても一人つまらなそうな顔してるんです」  
吉田先生は黙って聞いている。

「それに・・人って6歳までに1回もしたことがないスポーツって  
オトナになってはじめて上達しない、って  
聞きました。」

「ほお。それは興味深い話しだね。  
誰がそんなんこといつてたのかな」

クラスのみんなが遠巻きに先生とみっちゃんをながめている。

「おとうさんです。  
おとうさん、ゴルフやってるけど  
全然うまくならなくって  
子どものとき、1回もやったことがないからだ、って言い訳のように  
いってたけど、ほんとみたいです。  
小さい時  
ゴルフするひとつめったにいなくて  
せいぜいパターゴルフくらい。  
で、大人になって急に始めても  
上達速度が遅いらしいんです」



シビレをきらして  
男子は勝手にサッカーはじめたり、

女子も数人でドッジやったり  
鉄棒やり始めたコもいる。

「なるほどね。  
ボール遊びなどは必ず小さい時にだれでもするからね。  
学校でもバレーやバスケはやるけど、ゴルフはする機会がないなあ。確かに」

「私たち、6歳までにしたことがないスポーツは上達しない、  
という制限をもう4年以上過ぎてしまったんです。  
もう今からでも遅いくらいです」

先生は少し考え込んでいる。  
何を考える必要があるのだろう。

「わかった。じゃあ、今日は女子がサッカー、

男子はドッジだ」

先生は何かを決断したようにそう言った。

「えっ、一緒でいいよ。先生」

「いや、今日がはじめてだと全く何もわからないコもいるでしょう。

ある程度覚えられたら

男女一緒にしよう」

「先生、それじゃあひとつ提案があるんですけど」

「何」

「隣のクラスと合同でやるっていうのはどうでしょう」

先生は目を見開いた。

「あ、それは面白いね。

永本先生にでも聞いておくよ」

「永本先生、登校拒否が克服できるかも、ですよ」

「えっ？ 登校拒否？」

先生は何でそんなこと知ってるんだ、というような顔をして言った。

「あ、なんでもありません。」

みっちゃんはあわてて顔をブルブルふった。



■□■□■□■□■□■□

念願かなって

サッカーができたのに、

なんだかみっちゃんはうかない顔をしている。

「みっちゃん、どうしたの？希望通りサッカーできてよかったやん」

「そうなんだけさー。ちょっと違うな、っておもって。

私はサッカー自体をやりたかったことも事実だけど、

でも理不尽に思っていたのは先生の考え方」

みっちゃんは鉛筆まわしながら言った。

自分の中にイライラする気持ちをかかえているようだ

「どうして男女別々にして女子だけ休憩時間のように  
ドッジボールさせたか、っていうこと」

「んー。それが先生も言ってたいいろいろ具合が悪いって  
いうことなんじゃ」

「だから、そこがおかしいんだよ。

サッカーだったから、私がうるさくいったから

『君は熱心な生徒だね』とかいって

ごまかしてたけど、

ほんとはもう面倒になって

じゃあ一緒にしようか、ってことだけなんだよ」

「もう、いいんじゃない。いつまでも。

サッカーできることには

なったんだし」

私は少々みっちゃんにウンザリしてきた。

みっちゃんもそんな私を察したように

「そう。嫌われる。かわいくない。

理屈っぽい。

文句ばっかりいってるっていわれる。

何にも考えない、素直な可愛い

ふわふわした子のほうがモテる。」

「それは、わかんないけど・・」

そうかもしれないと

心の中では思った。

「サッカーだったから一緒にすることが

できたけど、もしこれが

すもうだったら？

柔道だったら？」



「すもうなんかやりたくないよ」

「やりたくないとかの問題じゃない」

「先生が授業として決められたことを  
勝手に自分の判断で男女バラバラしていいかどうか?って  
ことだよ。それも学年で話しあったことならまだしも、  
先生一人の考え方。

それと、何よりひっかかるのが  
**女子だから、いいだろう。**っておもわれた。

てこと」

「うん・・」

相づちうちながら、  
でももう、別にいいんじゃない。

私はそれほど  
自分にはこだわりがないな、とおもった。

「なにか、ハルちゃんは私の考えとは  
違うみたいだよね」  
みっちゃんは何かを気づいてる。  
みっちゃんほどのこだわりがない、というのと  
別に  
私は先生のことを  
やはり心底悪くおもうことができない。  
みっちゃんに心から共感することができない。

みっちゃんは  
それがおもしろくないようだ。  
**「私は、自分の思ってることを  
相手がだれであれ、意見を言える人になりたい」**

みっちゃんはさらに続けた。  
「みんな、何も口に出して言わないけど、本当は

どう思っているのか、  
陰で言ってた人がいるのかどうかわかんないけど、  
でも陰でゴソゴソ言っても仕方ない。  
何の解決にもならない」  
もうみっちゃんみたいな人は  
大統領にでもなればいいんだ。  
それくらいのこととて・・

私はハッと気がついた。

自分は女なのに女を見下してゐるということに。



## 6年生になった

---

サッカーの授業は男女混合で  
やることになり、  
みっちゃんが提案した  
隣のクラスとの  
合同体育も行われ、  
クラス別で  
リーグ戦なんかもやったりした。

みっちゃんはあれからさらに  
先生に  
何か意見をしにいったのか、どうか  
それはわからない。

みっちゃんから何も聞いてないし、  
私からも  
何も聞かなかった。

ただなんとなく  
私とみっちゃんの間に  
不協和音が生じてきた。

今まで私は  
ほとんどの時間を  
みっちゃんと過ごし、

休憩時間も  
放課後も一緒だった。

だけど、だんだんそうでなくなってきた。  
みっちゃんは、  
ゆかりちゃんやさちよと遊んだりしはじめ、  
私も

ユミちゃんと遊んだりするようになった。

ユミちゃんと遊んでると

なぜかとても心が安らいだ。

○●○●○●○●○●



## 転校生がやってきた

---

2学期になった。

転校生がやってきた。

くき しんいち君だ。

くき君の名前を先生が最初黒板に書いたとき。

クラスのみんなが一様にぎょっとした。

そこには「九鬼 慎一君」と書かれていたから。

九鬼なんて名前。九人の鬼じゃない。

いや、鬼だから九匹なのか。

九鬼君は真っ白な透明な肌をしていて

サラサラの髪の毛だった。その髪は窓からの光に反射して

キラキラ輝き、

赤茶に見えた。

このクラスにはいないタイプだった。

服装だってVネックの、

どこかのブランドと思われるような紺のセーターに

カッターシャツという格好。

そんな男子、学年探してもいない。

いや、私が今まで出会った中にもいなかった。

私は九鬼君を好きになったのだ。



その日から私は悩んだ。

「なんで九鬼君って九鬼って苗字なんだろう？」

九鬼ハルミになっちゃうじゃない。

私はもう、九鬼君と結婚した夢を描いていたのだ。

くきはるみ、くきはるみ。

ひらがなで書いたら「くきは」が苗字で「るみ」が名前だと思われそう。

くきはるみ。なんだかＮＨＫの童謡歌うおねえさんみたいだ。

そんなことを思いながら、

私は紙に九鬼ハルミとかしていくおまじないを繰り返した。

99回九鬼ハルミと書いて

100回目に本人に自分の名前を書いてもらうと相手と結婚できるという  
素晴らしい都市伝説。

99回九鬼ハルミと書くのは

頑張ってなんとかできるだろうけど、最後に相手に書いてもらうってどうしたらいいのかな。

私はペンを、つきました

唇のうえにのっけて  
考えた。

鉄棒なわとびいなりずし

<http://p.booklog.jp/book/51878>

著者：キャンディやぶこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/pinky77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/51878>

ブクログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/51878>

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブクログ